

茨の穴

Narrenfreiheit

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

逸見エリカは怒った。

西住まほと西住みほ——西住姉妹が、大会において準優勝になってしまった責任を取って、学校を辞めるのだという。

そのことがエリカは許せなかった。そしてエリカは誓う。必ずや自らの手で黒森峰を再興しよう。

そんなエリカの元に、西住姉妹の母、西住しほが訪れる。

これはエリカとしほ、二人の奇妙な絆の物語。

※このSSは某所からの転載であり、Pixivにも投稿してあります。

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
41	32	23	12	1

第1話

「くそっ！ くそっ！ くそっおー！」

逸見エリカは、その日何度目か分からない癩癩を起こしていた。自分の勉強机に幾度もその拳を叩きつける。拳の側面の皮はすでに破け、血で真っ赤になっていた。

彼女が暴れている部屋の中はそんなエリカの手以上にひどい荒れようだった。

床には椅子だったものがバラバラになって散らばっている。その他にも、破けた布団から綿が飛び出し辺り一面に広がっている。

授業で使うノートや教科書はビリビリに破けており、勉強などとてもできない状況になってしまっている。

普段の食事のために使っている食器類も、殆どが割れて床にその破片を光らせていた。エリカはそれを踏んでしまったのか、ところどころ赤い斑模様が床にできている。

まさに触れるものすべてを壊してしまっている状況だった。

エリカは元より癩が強い性格である。しかし、この状況はそれでは説明できないほどあまりに異常であった。

エリカがここまで荒れているのには理由があった。・

それは、彼女が今いる学校、黒森峰女学園において彼女が信じていたものが打ち砕かれたのが原因だった。

「許さない……………！ 私は絶対に許さない……………！」

エリカは喉がすり潰れそうなほどの声を出して言う。眉間には皺が濃く寄っており、瞳からは熱量のある涙を流している。

「絶対に許さない……………！ 西住みほ……………！ 西住まほ……………！」

きっかけは、数時間前に遡る――



「……………今、何と？」

エリカは自分の耳で聞いたことが信じられず、思わず聞き返した。

それはとても現実の出来事だとは思えなかった。

エリカの困惑した声が、黒森峰の倉庫に響き渡った。

だが、その言葉を口にした相手——黒森峰戦車隊隊長、西住まほは、その鉄仮面の剥がすことなく、冷淡にも聞こえるほどの冷静な口調で言った。

「言った通りだ。私とみほは、黒森峰から去る」

エリカは訳が分からなかった。

二度言われても、やはり信じられなかった。だが、目の前のまほの真剣な眼差しが、それを真実だと訴えている。

「どうしてですか……どうしてですか、隊長！」

エリカは何故かと問いかける。

だが、エリカはその理由を知っていた。

何故まほがそういう決断をしたのか、エリカには分かっていた。だが、エリカにはその理由を問わずにはいられなかった。

「……分かっているだろう、エリカ」

まほはさも当然のことを言うように言う。エリカがそれを分かっていることを知っているからだ。

「……副隊長のためですか」

エリカのその言葉に、まほは静かに頷いた。

「そんな……おかしいですよ！ 隊長には何の責任もないじゃないですか!? むしろ、悪いのは私で……」

エリカは尚訴えかけた。

事の原因は副隊長——まほの妹である西住みほにあった。

みほは数ヶ月前に行われた第六十二回戦車道全国高校生大会決勝戦において、十連覇のかかった黒森峰の勝利をふいにし、敗北する原因を作ってしまった。

悪天候の中、水没した戦車を助けに自らの戦車を抜け出したのだ。その結果、フラッグ車が撃破された。

そして、その水没車に乗っていたのはエリカだった。

完全な事故だった。そして、みほの行動も人道的に見れば間違った行為ではなかった。しかし、安全が確保されている戦車道においてそ

の行為は無駄とも言え、そのため敗因となつてしまったみほに対して
隊、OG会、および学校からの重圧が襲いかかった。

エリカ達水没戦車の乗組員はみほに対するバッシングが集中した
おかげで結果的に許されていた。

だがそれはつまり、みほ一人にすべてを押し付けているということ
である。

みほはその生活にかなり擦り減らされていた。

そのことに対しエリカも、そして姉であり隊長のまほも責任を感じ
ていた。

「……確かに副隊長の行為はあまり褒められたものではありません。
ですが、私はそれで副隊長を責める気はありませんでしたし、そもそ
も助けられた身として感謝しています。ですから、転校する必要なん
てないと思つています。隊長も、もちろん副隊長も！」

「そうだな……しかし、誰かが責任を負わねばならないんだ。そして
それは、私であるべきなのだ。だが、その責任は今みほに集中し、み
ほが生贄にされそうになっている。私は、それを見過ごすことはでき
ないんだ」

「だったら尚の事！ 次の大会で見せつけなければいいじゃないですか！

西住流ここにありと！ 西住姉妹、ここにありと！ 今ここで転校
するということは、逃げるということですよ!?! 西住流たるあなた達
が、西住流を捨てて逃げるといふことなんですよ!?!」

それがエリカには気に食わなかったのだ。

エリカはすべて過ぎたことだと思つていた。

しかしそれに固執するものが多い現状では、実力で見返すしかない
と考えていた。西住姉妹が黒森峰に優勝旗を西住流によって取り戻
す。

それが西住流に心酔するエリカにとって歪んだ現状を戻す最も正
しい術だった。

だが――

「……すまない、エリカ。私にはもう、今のみほが戦車道を無理矢理す
る姿を見ていられないんだ。そして、私はみほのためなら、自分の立

場を捨てていいと考えている」

「そんな……」

エリカは絶望した。

いや、失望と言ったほうが正しいだろう。

自分の信じていたものを、信じていた人が否定したのだ。

西住流という流派を、西住まほというその体現者が、である。

「……捨てるんですか、西住を」

「……ああ」

まほはエリカの言葉に、瞼を閉じながら、言葉を零すようにそう答えた。

「……ふざけないください！ 西住流そのものであるあなた達が、西住流を捨てたなら、西住流は一体どうなってしまうんですか!? 戦車道はどうなってしまうんですか!? 私の尊敬する人は、鉄の心を持ち、鋼の掟を守る、そんな人達です！ それを、それを……!」

エリカはもはや感情のままに言葉を発していた。

最初は困惑し、悲しんでいたはずが、今ではまほに対し初めて怒りをぶつけている。自らにも原因があるのにもそれを助長させていた。そこには、不甲斐ない自らへの怒りも含まれていた。

だが、まほは表情も口調も一切変えずに言った。

「……すまない」

「……ふざけるな……ふざけるな!」

その謝罪が、エリカを爆発させた。

「私は……私はずっと西住流であるあなた達を信じて生きてきた！ あなた達のようにになりたいと思っていた！ でも、でもあなた達はそれを捨てるんだ！ 私の信じていたすべてを否定しようとしているんだ！ 私自身を否定しようとしているんだ！ 西住流そのものも、副隊長の行為も、何もかも！ そんなもの、許せるはずがない!」

エリカは完全に心情を吐き出していた。自分のすべてを曝け出していた。何を言っているのか、自分でも分かっていたいなかった。抱いていた尊敬が、憎しみに変わりつつあった。

「……分かってくれとは言わない。私はただ、そのことを伝えに来た

だけなのだから。……黒森峰のことは頼んだぞ、エリカ」

しかし、まほはそんなエリカに向き合うことなく、背を向けて去っていく。

もう話すことはない。まほの背中がそう語っていた。

「待て……待ちなさいよ、西住まほおー!」

エリカの叫びが虚しく格納庫に響き渡った。

まほにはその響きは届くことなく、エリカは一人残された。



「くそ……! くそ……! 畜生……!」

エリカはもう何度呟いたか分からない怒りの言葉を吐いた。

もはやエリカの心はぐちゃぐちゃだった。

まほに裏切られた怒り。みほが自らの行為を否定した怒り。そして責任があるにも関わらず何もできない自分への怒り。

様々な怒りが交じり合い、もはやどれがどの怒りか分からなくなっていた。

「逃げやがって! 逃げやがって……! 西住を、黒森峰を捨てやがって……!」

そのどろどろに混ざった怒りの中から、まほとみほ、西住姉妹への怒りが昇華されている。

「許さない……! 絶対に許さない……!」

すべての怒りが憎しみへと変貌していく。

「私は絶対に許さない……!」

やがてそれは憎しみの塊となった。

西住姉妹に対する巨大な憎しみへと。

「私が、私が体現してみせる……! 強い黒森峰を! 西住流を! あの姉妹ではなく、私の手によって!」

その憎しみは、これからのエリカにとって一つの巨大な指標を作り上げた。



翌日、黒森峰戦車隊の隊員において一、二年生だけが戦車格納庫内の一箇所を集められた。

集めた人間は、西住流の家元、西住しほである。

突如西住流の家元から招集を掛けられ、誰もが動揺していた。

一応みな、まほとみほの事は事前に伝えられているため、そのことに関することだと予測していた。

誰もが噂を囁き合う中、カツカツと甲高い音が鳴り響いた。学校ではほぼ聞くことのないハイヒールの音だ。

その音に全員が話を辞め、姿勢を正す。

やがて、黒森峰生の前に黒いスーツを着た女性が現れた。しほである。その背後には、同じくスーツを着込んで手にクリップボードを持った女性達がついていた。

しほは厳つい表情で全体を見回すと、その表情以上に厳しい声色で口を開いた。

「これで全員ですか。どうも皆さん、西住流家元、西住しほです。……さて、今回全員知っている通り、我が娘のまほとみほが黒森峰から転校しました。これに関しては我が西住にとつて恥ずかしい限りです。しかし、そこで止まっては西住流の流れを組む王者黒森峰としてはそれ以上に恥ずべきことです。よって、黒森峰の誇りを取り戻すために新たな隊長と副隊長を選出したいと思います。特に隊長に選ばれたものには、私から直々に西住流の何たるかを教育させて頂きます。皆さんに集まってもらったのは、そのための試験を行うためです」

しほの言葉に隊員達に動揺が走った。

皆、順当に次の三年生、つまり現在の二年生の中から誰かが選ばれると思っていた。それを、しほは自ら選出しようと言うのだ。

西住流家元が自ら高校生の活動に関与してくる。それだけ、この事態が大きいことを隊員達は痛感した。

だが、動揺する隊員達の中で一人だけ、この状況を好機だと思っ
ている人間がいた。エリカである。

最前列に立っていたエリカは困惑する隊員達を尻目に、自らを強調するように一歩前に出た。

「あなたは……」

「一年、逸見エリカです」

しほの問いかけに、エリカは鋭い目つきと口調で答えた。

「ええ、覚えています。確か以前何度か見かけたことがあります。まほが後任として選んだのもあなたでしたね。しかし、私はあなたの本当の実力を知りません。故に、この場を用意させて頂きました。もしあなたが次期隊長に相応しくないと分かれば、すぐさま別の人間を隊長にするつもりです」

「分かっています。それでも、隊長になるのは私です」

エリカの言葉にしほは一瞬驚きの色を見せた。だが、すぐさま元の冷たい表情に戻り、厳粛な声を轟かせる。

「それでは、まずは筆記テストを行います。試験会場は大講義室で行います。それでは全員、移動！」

こうしてしほによる隊長選出テストが始まった。

始めは筆記テストから始まり、その次に戦車の備品に関するテスト、さらにその次は整備に関するテスト、それらを終えてやっと戦車に乗った実技試験テストが行われた。

内容はどれも過酷を極めるものだった。普段の黒森峰のカリキュラムですら甘く思えるほどに厳しかった。

殆どの生徒が脱落した。まだ教練を殆ど受けていない一年生は勿論、二年生も数多く戦車に触れることすら出来ずに脱落していった。それほどまでにしほのテストは過酷を極めた。

最終的に実技テストへと合格したものは、全体の五分の一にも満たなかった。

その中に、エリカはいた。

エリカはなんと、すべてのテストにおいて上位の成績を収めていた。筆記試験においてはトップであり、その他の科目においてもほぼトップに近い成績を出していた。

最終試験である実技試験では、それぞれの隊員が試験に落ちた隊員

を戦車の搭乗員として選び、車長として戦車戦を行うという内容だった。

全体を二つのチームに分け、そこから総合的な視点を見て各車両に評価を下す。それが実技試験の内容だった。

それぞれのチームの全体の指揮には西住流から派遣された流派の人間が担当した。その指揮の元、それぞれの車長がどれだけ自らの色を出しつつも隊の連携を重視し、有効に動くかという複雑かつ厳しい試験だった。

誰もがその試験に苦しんだ。唯一、エリカを除いて。

「このままいけば一分後接敵するわ。ルートは十時方向。射撃準備用意」

「は……はい！」

エリカはあくまで冷静だった。エリカ自身、不思議と頭の中が冷え込んでいた。

腸に燃えるような怒りを煮えたぎらせながらである。

例えるならマグマが地下に流れている凍土と言っているだろうか、とにかく、エリカは戦車道の試験に関してはこと冷静であった。むしろ、以前よりも冴えてすらいた。

結果として、エリカは実技試験においても優秀な成績を収めた。

それはエリカがすべての試験に上位の成績を残したことを意味する。それが導く道は、既に決まっているようなものだった。

翌日、今度は三年生も含めた黒森峰の戦車隊隊員が全員集められた。

そこで、しほは全員の前に立ち、口を開く。

「先日行われた隊長試験の結果が出ました。これから呼ばれた者は前になさい。……一年、逸見エリカ！」

「はい！」

エリカははつきりと返答すると、隊の列の中から上級生を掻き分け前に出ると、しほの隣に並んで腕を組む。

「彼女は先の試験において最も優秀な成績を収めました。よって、一年生ながらも彼女を隊長として任命します。全員、異論はないですね

？」

『……はいー』

一呼吸置いて隊全体からの返答が来る。

それはエリカの実力を認めたというよりも、西住流家元に逆らうのが恐ろしいといったような雰囲気だった。

だが、エリカはそんなことを気にはしていなかった。自らが隊長になった。その事実さえあれば良かった。

隊長になることはエリカにとって通過点にしか過ぎなかった。

エリカの目的は、もつと先にあるのだから。

その後、エリカは全員が帰った後、一人しほに呼び出されていた。

呼び出された場所は小さな作戦会議室であり、個室に二人だけというなんとも息の詰まりそうな空間だった。

エリカは椅子に座るしほの前で、両手を背中に組んだ、いわゆる基本教練における休めの姿勢で立っていた。

「あなたを呼んだのは他ではありません。これから西住流の何たるかをあなたに教える前に、あなたに西住流の心構えを教え込むためです」

「はい」

エリカは凜々しい声で答えた。

瞳は真っ直ぐにしほを見つめている。

「いいですか、あなたも知っての通り西住流とは『撃てば必中、守りは固く、進む姿は乱れ無し、鉄の掟、鋼の心』を信条としています。この言葉の通り、西住流を背負うからには完璧であらねばなりません。それをあなたは理解していますか？」

「はい」

「……いいでしょう。ですが、今のあなたはその西住流の姿にはまだ至っていません。今回の試験、あなたは殆どの科目において優秀な成績を残しましたが、まほとみほならばすべてにおいて最上位の成績を残したでしょう。あなたは、そんなまほとみほの後を継がねばならないのです」

「……っ」

まほの名前が出た瞬間、エリカの顔が僅かに歪んだ。

その歪みを、しほは見逃さなかった。

「……どうやら、まほとみほに対して何やら思うところがあるようですね」

「……はい」

「言ってみなさい。実は気になっていたのです。試験前のあなたの自身に満ちた態度。一体それはどこから来るのか、というのを」

しほが言うと、エリカは逡巡した後、恐る恐る、だが確固たる意志を秘めて言葉を紡いだ。

「……失礼ながら、私はあなたのご子女である西住姉妹を、恨んでいません」

「……それは、どうしてかしら」

しほはエリカの言葉に怒ることも驚くこともなく、ただ黙ってエリカの言葉を待った。

エリカは己の娘に対しそのようなことを言う自分に対してのしほの態度に内心驚きつつも、さらに自らの思いを口にすることにした。

「私は、ずっと西住流の体現者たる西住まほ、そして西住みほに憧れて戦車道をやってきました。西住まほのようにになりたい。西住みほと肩を並べたいと、中学の頃からずっとそればかりを考えて生きてきました。……ですが、あの姉妹は西住流を裏切って、この学校を去った。戦うべき定めから逃げた。私には、どうしてもそれが許せないんです。だからこそ、私は決めました。西住姉妹の代わりに、私が西住流の体現者となり、黒森峰に優勝旗を取り戻そうと。それこそが私にできるあの失態への罪滅ぼしであり、ケジメであり、復讐なんです」

それこそが、エリカの今の目標であった。

生きるよすがであった。

「……なるほど」

しほはエリカの言葉に静かに頷いた。

そして、しばらくの静寂の後、しほは自らの言葉でその静寂を破つ

た。

「……なるほど、あなたの意志、確かに理解しました。それなら尚の事
厳しい教練をする必要がありそうですね。西住流の体現者となると
言ったからには、生半可な訓練で済むとは思わないことを肝に銘じな
さい」

「元よりそのつもりです」

エリカとしほは、互いにその鋭い視線を交差させた。

こうして、ここに新たな師弟関係が誕生した。

西住の家元と、西住の娘を憎むもの。

そんな不思議な師弟が。

第2話

翌日よりさっそく、エリカの隊長として、そしてしほの弟子としての生活が始まった。

しほより指導を受ける時間は早朝と学校の終わった後の放課後と夜である。

学校にいる間は隊長としての職務を全うし、それ以外の時間はしほより西住流についての教えを受けるということになっていた。

しほはエリカに指導するために、学園艦に仮住まいを設けた。仮住まいと言っても、普段は重役が別荘に使っているような屋敷であり、しほがどれだけ黒森峰という学園艦にとって大きな存在かをうかがい知ることができた。

しほの指導は苛烈を極めた。

「何をやっているの！ 状況判断が一秒遅い！ 戦場で一秒の遅れは命取りになると、何度言えばわかるの！」

「はい！」

エリカの指導には西住流の門下生が付き合っていた。エリカを車長とした戦車に乗るもの、そして相手として戦うものである。

その戦いにおいては、エリカは基本相手の半分以下の戦力しか与えられなかった。

「さきほどの戦いは何？ あんなにあつという間に包囲殲滅されて。相手の行動を完全に読み早い足回りで移動すればこんな事態にはいたらなかったはずよね？ 分かっているのかしら？」

「はい、申し訳ありません……！」

「謝る前にまず反省点を考えなさい逸見さん！」

「はい！」

「それではもう一度！ 搭乗なさい！」

しほの指導は隊長試験ですら簡単なものと思わせるほどに厳しかった。

普段の黒森峰での訓練など、もはや兎戯に等しかった。

エリカはそれについていくために必死に努力した。

しほから指導を受けていない時間にも、必死に勉強に励んだ。

「ティーガーの走行能力から考えてこの布陣は突然の奇襲に不利だから……」

エリカが西住流の勉強のために使っているノートは、二ヶ月で十冊に到達するほどだった。それほどまでに、エリカは熱心に勉強した。

だが、必ずしも努力が追いついていくれるとは限らない。

「はあ……何度言えば分かるのかしら。これぐらいの戦力差、正攻法で覆せないでどうすると言うのかしら」

「す……すみません、家元」

その日の早朝もまた、エリカの指揮する戦車隊はしほの用意した門下生の部隊に敗北していた。大きな戦力差があるため、本来ならば仕方のないことである。

だが、西住流はそれをよしとしなかった。

「あなたの指揮が完璧だったならば、敗北することはないのです。それをあなたは、僅かな状況判断の遅れと過ちのせいで部隊を敗北させてしまいました。これでは、西住流を名乗るなど夢のまた夢ですね」

「はい……」

「……もういいです。今日の早朝訓練はこれぐらいにしておきましょう。早く部隊の方の朝の訓練の準備をなさい」

しほはそう言い放つと、エリカに背を向け去っていった。

エリカはその背中を悔しい思いで見つめることしかできなかった。

太陽の光が二人の隙間を照らす。日はまだ昇ったばかり、時間にして朝の七時である。エリカが朝の訓練を開始してから一時間半が経過していた。

しほを最後まで見送ると、エリカは疲れた体を引きずって格納庫の方へと向かった。しほととの訓練をしている場所は黒森峰の演習場を借りているため、格納庫の距離はそれほど遠く無かった。

格納庫に入ると、既に黒森峰生が格納庫の各所に集まっていた。

しかし、集まっている数は少なく、また着ている隊員達の態度もどこかだらけている雰囲気が見受けられた。

「全員、集合！」

エリカの張りのある声が格納庫に響き渡った。すると、それまでばらばらに集まっていた隊員達がエリカの元に一箇所に集まった。だが、その動きもどこか緩慢だ。

「遅いわよ！ 何をしているの！」

エリカの怒声が飛ぶ。集まった隊員達は無言でエリカの怒りの言葉を聞くのみである。

「……はあ！ いいわ、とにかく朝の訓練を始めるわよ。全員、搭乗！」

だがエリカは、それ以上叱りつけることをやめ、すぐさま訓練に入った。

時間が惜しかったのもある。しかしそれ以上に、このような態度がすでに日常化しつつあるため、叱つても無駄だと半ば諦めている部分があったのだ。

そうして始まったその日の早朝訓練も、いつも通りに終わった。

いつも通り、西住姉妹がいた頃と比べるとどこか気が抜けているように感じる訓練であった。

エリカはそのことに怒りを感じつつも、あえて表には出さずに訓練を終了した。

やはりそこには諦めの感情があった。

「まったく、どいつもこいつも……！」

だが、それを完全に自分の内に閉じ込めておけるほど、エリカは器用でもなかった。

エリカは一人、トイレの個室で悪態を付きながら地面を蹴りつけていた。

「どうしてよ、なんでみんなあんなにやる気がないのよ……！」

まほのいた頃の黒森峰とはまるで違う、墮落した黒森峰。

それがエリカには気に食わなかった。

——これでは、黒森峰を再興させるどころではない……！」

そんな苛立ちが、エリカの心をかき乱していた。

「どうして、どうして……！」

と、そこで複数人の話し声が聞こえてきた。どうやら集団でトイレに入ってきたグループがいるらしい。

エリカは咄嗟に痲癩を収め、口を閉じる。さすがにトイレでこうしてストレスを発散していることがばれるのは恥ずかしかった。

その集団はとりとめのない会話をしながら他のトイレに入り、用を足していく。そうしてその集団は一過性の雨のように通り過ぎて行くはずだった。

その会話をエリカの耳に入れるまでは。

「そういえば逸見ってさー」

エリカは突如自分の名前が出てきて驚いた。そして、一体どんな会話がされるのだろうか、耳をすませる。

「マジウザいよねー。一年で隊長に選ばれて調子乗ってるっていうかさー」

「あー分かる分かる。私達上級生をほっぽいて隊長って何様って感じよねー」

どうやらそれはエリカの先輩たちの会話のようだった。

「まったくよ。西住隊長と比べると全然実力もない癖にね。試験に合格って言うけど怪しいよねー」

「そうそう！　なんかワイロでも渡したか出来レースだったんじゃないの？　ほらあいつ西住隊長に可愛がられてたし」

「あーありえるー！　西住隊長も甘いなー。でもやっぱり隊長は西住隊長が良かったよねー、逸見なんかよりずっと——」

バンツ!!!

そこでエリカとうとう我慢できず、激しい音と共にトイレの個室の扉を勢い良く蹴り飛ばした。

「あっ!?　い、逸見……隊長……」

先ほどまで噂話をしていた女子生徒達が急に青い顔になってエリカを見る。

エリカはその顔に見覚えがあった。紛れも無い自分の隊の先輩であり、実力不足と判断して二軍落ちしていた先輩達でもあった。

「……………」

エリカは瞳孔を開くほどに怒りの形相を浮かべる。
その顔に先輩達はさらに怯えた顔になり壁にもたれ掛かる。
そうしてエリカはその先輩達の方に近寄って行き、

「ひっ！」

——何もせずにトイレから出て行った。・

「…………え？」

エリカは足をカツカツと鳴らしながら早足で自分の寮の部屋への道を辿っていた。

今の彼女の頭の中は怒りでいっぱいだった。

自分の事をバカにされた怒り。

西住流を貶された怒り。

そして何よりも、まほと比較され何から何まで劣っている自分自身への怒り。

「くそっ！ くそっ！ くそっ…………！」

——頭に来る！ 本当に頭に来る！ 私は、私は未だあの西住まほの足元にも及べていないだなんて！

内心エリカは分かっていた。

何故隊員達がやる気の状態を見せるのか。

それはエリカが前の隊長と比べて劣っているから。

なぜしほが落胆した表情をエリカに見せるのか。

それはエリカが娘達と比べて劣っているから。

そのことがエリカには許せなかった。自分自身の不甲斐なきが本当に情けなくてしようがなかった。

エリカは寮の扉を叩くように開く。

その日はとても普通の勉強などする気にはなれなかった。

エリカは血の登った頭のまま、乱暴に机に座ると、自習用のノートを広げた。戦車道の自習用ノートだ。

「私は超えるんだ………… あいつを………… あいつらを…………！」

そのままエリカは目を大きく開いて、しほより貰った教本を狂ったように読み始めた。

エリカはその日以降、自らの勉強量を三倍に増やした。

文字通り寝食を忘れて、戦車道に打ち込んだ。

すべての時間が惜しいと、食事は二日に一回あるかないか、睡眠は体に限界が来たときに数時間だけ、といった程だった。

しほとの訓練にもよりいっそう熱を入れた。

それまでが手を抜いていたわけではない。しかし、今までと比べてはるかに高い集中力で訓練に挑んだ。

「ふむ……少しは改善の兆しが見えてきたようね、逸見さん」

すると、しほからも以前より認められるようになってきた。

エリカにはそれがとても嬉しかった。西住流の家元に認められる、そのことがエリカに無上の喜びを与えた。

この人に褒められるならば、とエリカはさらに自主練習に熱を入れた。

また、隊の人間への態度も改めた。

「そこっ！・ 集まるのが遅い！ そんなことで黒森峰の隊員が務まると思うのっ!？」

エリカはこれまで諦めていたあらゆる怠慢を許すことを止めた。目に付くものは、すべて叱咤することにした。

——自分が舐められているのは隊長としての威厳がないからだ、ならば前隊長以上に厳しくなるしかない。

それがエリカの出した結論だった。

まほも隊の規律に関しては厳しかった。

だがエリカはそれ以上に厳しくなることを決めた。そうすることで、前隊長であるまほの印象をかき消し、逸見エリカという新たな鬼の隊長が現れたことを印象付けるためである。

また、普段の普通の勉強へも力を入れた。

まほは勉強においても好成绩を残していた。そこでもエリカはまほに勝りたいと思ったのだ。

結果、エリカは二十四時間常に精神の緊張が張り詰めている状態となっていた。

心休まるときはなく、趣味のネットサーフィンや日課のボクササイズも殆どやらなくなった。好きだったハンバーグもまったく口にし

なくなった。

そんな生活を、エリカはなんと一年生から二年生になる数ヶ月間ずっと続けた。それはとても常人には送れない生活だった。

だが、エリカも人間である。そんな生活がいつまでも続くわけが、なかった。

「逸見さん、今日は……ちよつと逸見さん、聞いているの!？」

その日、二年生になって間もない頃の早朝訓練のことだった。

「あ……はい、すいません」

しほの言葉にエリカは非常に曖昧に答えた。

その日のエリカはずつとおかしかった。

睡眠も十二時間前に二時間もとつたというのに、何故か意識がはつきりとしなかった。

それでもしほの訓練に出ようと、エリカは朝のいつもの時間にふらつく足取りで家を出て、こうしてしほの前に立っていた。

だが、今のエリカにはしほの姿がはつきり見えず、声もエコーが掛かって聞こえてしまう状況だった。

「どうしたというの今日は。そんなことでは西住流を継ぐ者としては――」

エリカにはもうすでにその言葉には届いていなかった。

聞こえてくるのはくぐもつた音だけ。

見えるのはぼやけた輪郭だけ。

頭がガンガンと痛み、体は悲鳴を上げている。

言葉に出来ないほどの苦痛がエリカに襲いかかってきた。

だがエリカはそれを呻き声で表現することなく、視界が闇に溶け、糸の切れた人形のように地面に倒れた。

「……逸見さん？ ちよつと逸見さん!？」



「……んっ……」

エリカは白いベッドの上で目を覚ました。

見慣れたベッドと天井、部屋の間取りから、そこはどうかやら学校の保健室であることをエリカは理解した。

「……なんで私……そうだ、早朝訓練……!」

エリカは早朝訓練が始まっていることを思い出し、すぐさま体を起こそうとする。

「……あれ?」

しかし、上体を起こすために腕に力を入れたはずが、まったく力が入らずにするつと崩れ落ちてしまう。

一体どうして。

自分の身に起こったことが分からずエリカが横になりながら頭の上に疑問符を浮かべているときだった。

「ああ、起きたのね!」

ガラリと保健室の扉が開く音と同時に、その扉の方向から声が聞こえてきた。

その聞き慣れているはずなのにどこか聞きなれない声色の主は、しほだった。

「……家元?」

「よかった……突然目の前で倒れたから、心配していたの」

しほは今までの鉄仮面が嘘のような焦った顔つきをエリカに見せた。

そこでやっとエリカは、自分が倒れたことを理解した。

「……そっか、私、倒れたんですね」

「ええ……。どうやら、あまりにもあなたに背負わせすぎていたよね、謝るわ」

「え?」

エリカは訳が分からなかった。

倒れたのは自分の責任のはずなのに、何故目の前の師は頭を下げているのか。

「思えば、私はあなたに娘以上の重荷を背負わせようとしていたのね。娘達が西住流から離れていつて、それで困惑しまつて……あなたに、

過度な期待を寄せてしまった。でも、まさか倒れるほどに過酷な環境に追いやっていたなんて……これからは、訓練の内容を軽くしましう。西住の血を引いていないあなたには、あまりにも重すぎたわ」

「待ってください……待ってください！」

エリカはしほの言葉を聞き、大慌てで力が出ない体でしほの体に掴みかかった。

「逸見さん……!?!」

「待ってください！ そんな、訓練を軽くするなんて、言わないで下さい！」

エリカは焦った。自分が倒れた程度で、訓練を軽くされては困るから。

しほは理解できなかった。

なぜこの娘は、自分が倒れたというのにさらに過酷な訓練を求めようとするのかを。

「そんな……あなたは、倒れたのよ？」

「どうだつていいじゃないですかそんなこと！ 私は！ 西住まほを！ 西住みほを！ あなたの娘を超えたいんです！ なのに、この程度で訓練を軽くするなんて言われたら、私は、私は……」

エリカはいつの間にか涙を流していた。

自分の不甲斐なさと、西住姉妹を超えられないという恐れからくる涙だった。

しほはそんなエリカのそんな姿を見て、かつてないほどの驚きを受けていた。

これほどまでに自分に食らいついてきた教え子はいなかった。

これまでの教え子達は途中で諦めるか、自然と身の丈に合わない訓練を辞め自分の才能に見合ったものを選んでいった。

だがエリカは違った。

はつきり言つて、エリカは多少秀でてはいるも天才ではなく凡才であつた。

しほは今でもそんなエリカには厳しすぎる訓練を与えてしまったと思つている。

だがエリカはその訓練についていくために倒れるほどの努力をし、そして本当に倒れてしまってもまだその訓練を求めているのだ。

それは異常というまでの執着だった。自分の娘への憎しみだけで、ここまでの執着ができるのかと言われれば、それは違うのではないかとしほは思った。

恐らくそれはエリカの気質なのだ。エリカはこれまでずっと一人で努力してきたのだろう。努力することが当たり前だったのだろう。結果として、エリカはどんなことにも目標を達成するまでに喰らいつく生き方が当然となっていたのだろう。

しほはエリカのその一面に、かつてないものを見ている気がした。そしてなによりも、しほは昔の自分の姿をエリカに重ね始めている。

西住という大きな責任を一人で背負わせられて、誰も頼ることが出来ずずっと一人で生きてきた、そんな自分自身の子供時代の姿を。

——もしかしたら、もしかしたらこの子なら本当に西住を。

そんな悪魔の誘惑にも似た気持ちだが、しほの中から湧いてきた。

「……分かったわ。訓練の内容は、これまでと同じとします。ただし！ 私生活における勉強の時間や睡眠時間もこちらで指定させていただきます！」

しほは厳しい表情でエリカに言った。

エリカは驚いた後に、またも不満気な表情を浮かべた。

「し、しかし……」

「それが嫌なら今すぐ訓練を辞めます！ 自己管理ができない戦車乗りなど三流以下よ！」

「は、はい……分かりました……」

エリカは渋々と言った様子でその条件を受け入れた。

しほはエリカのそのような姿を見ると、表情を途端に柔和に崩し、そっとエリカの頭を撫でた。

「家元……？」

「いいの、あなたはきつといい戦車乗りになる……だから自分を大切にさない。エリカ」

しほはエリカを名前で呼んだ。

まるで新しい娘が出来たような、奇妙な感覚に襲われていたからだった。

しほは穏やかな手つきで、混乱しているエリカの頭を撫で続けた。

第3話

エリカの倒れた数日後から、しほはエリカへの特訓を再開した。数日間は休養とした。

エリカは渋ったが、きちんと休息をとることも西住流の人間として必要なことだと言いくるめるとエリカは受け入れた。

特訓の内容自体はしほがエリカに言った通りに変わることはなかった。

だが、エリカの私生活における自学においては、しほの立てたスケジュールに従うことになった。

そこには戦車道の勉強、学校の勉強がバランスよく組み立てられており、自由時間もちゃんと設けられていた。

エリカは最初その自由時間を戦車道の勉強に使おうとしたが、そのことをしほに相談するとしほから反対された。

「しっかりと休養を取ることも一流の選手には必要なことです」

エリカはしほのその言葉に反論できず、仕方なくその自由時間を自由時間として受け入れることにした。

そうしていくことで、エリカの精神にも多少の変化が訪れた。

休息を設けたことにより、エリカの心にも僅かながらゆとりが生まれたのである。

まほに追いつこう、みほに肩を並べようと無理をしていた頃と比べると、少しばかり気が楽になった。

そして、無理に緊張の糸を張らなくなったことにより、戦車隊の指揮へも少しばかり穏便になった。

「すいません隊長！ 始まる前に急にお腹が痛くなって……！」

「……そう、ならしやうがないわね。でも、そういうことは事前にちゃんと連絡しておくこと。分かった？」

「は、はいー！」

部下に対する当たり方も以前より柔らかくなったのだ。

鬼の隊長であろうとしたことも、無理をしていたからである。

無理を辞めたのならば、隊全体をゆつくりと見直し、無駄な怒りを

貯めずに済むようになったのだ。

すると、なんと隊の雰囲気は以前よりも良くなったのだ。それまでギスギスしていた隊の雰囲気は軟化し、少しずつだか以前の黒森峰に近づいていったのだ。隊の規律を厳しく守りつつも、女子高生らしさがそこにはあり、そしてなおかつ、隊長を尊敬する黒森峰の姿に。

エリカはつまり尊敬すべき隊長として認められ始めたのだ。

まほとは違うかもしれない。まほには届かないかもしれない。しかし、新しい隊長は隊長で頑張っている。そんな風に噂されるようになったのだ。

それは、黒森峰というチームにとって明るい出来事だった。

「全車、前進！」

エリカの凛々しい号令が飛ぶ。

『了解！』

それに対しはつきりとした返答が戻ってくる。

隊の心が再び一つになるうとしている証拠だった。

さらに変わったことがある。

「お疲れ様、エリカ。今日はよく頑張りましたね。全体の動きもだいぶ良くなってきました」

「いいえ、まだまだですよしほさん」

しほが以前よりも優しくなったこと、そしてエリカがしほのことを『しほさん』と呼ぶようになったことである。

「そんなことないわ。状況判断においてはもはや問題ないぐらいにはなっているわ。あとは戦術と戦略的のところだけど、ここはゆっくりやっつけていきましょう」

「ですが、隊ちよ……まほさんはもつと完璧でした」

「いいのよエリカ。あなたはあなたの指揮官としての才能を伸ばしなさい」

しほは大きく反省していた。

エリカにあまりに多くを求めてしまったことを。そして、エリカにはエリカのいいところがあることにも気がついた。

そこを伸ばしゆつくりと成長させていけば、エリカは立派な西住流

の人間になれることをしほは確信していた。

それだけ、エリカの普段の訓練の努力が目に見えて結果に出始めていたということでもある。

だが、エリカはやはり納得できなかった。

「私の才能……ですか。私に才能など本当にあるのでしょうか……」
「何を言っているの。私の指導にここまで喰らいついてきたのはあなたが初めてなのよ」

「しかし、それは所詮喰らいつくので精一杯ということでもあります。まほさんはこの訓練を簡単にこなしたのでしょうか？ それなのに、私は……」

エリカは未だ歯がゆい気持ちでいた。

しほの態度が穏やかになったとはいえ、まだしほの指導についていけない部分は沢山ある。

しほはゆっくりやっていけばいいと言うが、エリカは早く成果を出したくて仕方がなかった。

なぜなら、もうそろそろ六十三回目の大会が迫っているのだから。

エリカとしては、再び黒森峰に優勝旗を取り戻したかった。

そのためには、まだまだ実力が足りないと自分では思っていた。

エリカはその焦りは、ゆっくりとエリカを育成していこうというしほの気持ちとは真逆を行っていた。

そのことが、エリカを余計焦らせる。

「焦る必要は無いわ。あなたはまだ二年生じゃないの。ゆっくりと、そうゆっくりでいいの」

「……しかし……」

エリカとしほの距離は確実に縮まってはいた。

だが、その決定的な部分で二人は平行線だった。

エリカがそのやきもきとした気持ちを燻らせながらもしほの特訓を受け続け、黒森峰の指揮を取っているうちに、いつしか大会の抽選会の日になった。

そこで、エリカは見てしまった。

とても信じられない、恐るべき光景を。



エリカは先程見たものが信じられなかった。

第六十三回戦車道全国高校生大会の抽選会。どの高校がどこの高校と当たるかという大切なくじ引きの日。

そこで代表としてエリカが引いたクジによって、一回戦目は知波単学園とあたることになった。はつきり言って簡単な戦いだとエリカは思った。知波単は戦車の質も戦術も下位にあたる学校である。

低性能な九七式中戦車で、取る作戦は呐喊ばかり。そんな学校に黒森峰が負けるはずはないと思った。

それよりも、おそらく二回戦に当たるであろう奇策を取る継続高校、三回戦に当たるであろう伝統のある聖グロリアーナ女子学園をどうするか考えるべきだとエリカは思った。

そうしてエリカが作戦を考えながら壇上を見ていたときだった。クジを引きに来た新たな高校、大洗女子学園の順番がやって来た。エリカは大洗女子に興味など無かった。お金の無い新規参入校である。どこに当たろうと一回戦負けするだろうと思ってそれまで名前も忘れていた。

——その姿を見るまでは。

「……………、そ……………!?!」

そこでクジを引きに来た生徒の姿は、エリカのよく知った姿であった。

亜麻色のボブカットを揺らめかせる白い制服に身を包んだその少女。

その姿を見て黒森峰の誰もが動揺し、声を上げた。

その名は——

「西住、みほ……………!?!」

黒森峰にとってもエリカにとっても因縁深い相手、西住まほの妹、西住みほの姿がそこにあった。

エリカは咄嗟に立ち上がり、会場を見回す。

——どこかに、どこかにいるはずだ。

そう思って視界を動かす。会場に何百人もいる生徒達の中から、その姿を探す。そして、見つけた。見つけてしまった。

複数人の大洗女子に囲まれている、その姿を。

大洗の制服に身を包んだ、まほの姿を。

「大丈夫、エリカ？」

エリカは未だ信じられないといった様子で抽選会場の外から出て街の中を歩いていった。そんなエリカの横で歩いて声を掛けてくれているのは、他の誰でもないしほだった。

「……はい、大丈夫です。しほさんこそ、お辛いでしょように」

「いいのよ私は。まさかあの場で二人を見つけたと聞いたときは驚いたけれど」

しほもまた抽選会場にいた。

いたと言っても、外で役員の人間に挨拶をしていたため、実際の抽選会場を見たわけではない。

しほは会場から出た黒森峰の生徒達からまほとみほのことを聞かされたのだ。

「まさか二人がまだ戦車道をやっていたなんて……西住の家を出たというのに、何故」

「まったくです……私も、自分を抑えるので精一杯でした」

エリカは自分の左腕を抑えながら言う。

彼女の腕は、会場で二人の姿を見たときからずっと震えていた。

「……思う所はいろいろあるでしょうが、まずは落ち着きましょう。……そうね、あそこなんかいいんじゃないかしら」

そう言っしほが指差したのは、街の中でも目立った外見を持つ店だった。

看板には『戦車喫茶』の文字が書かれている。

「戦車喫茶……ですか」

「ええ、役員の方がこのことを教えてくれてね。私一人では入る気にはなれなかったのだけれど……あなたと一緒になら恥ずかしくない

かしら」

しほはエリカに笑顔を向けて言った。

エリカのことを気遣ったことだと、余裕のないエリカにも分かった。

「はい……分かりました」

だからエリカはその申し出を受け入れることにした。

しほに気を使わせているのは、あまりにも恐れ多いと思い、またその気遣いを嬉しく思ったからでもあった。

エリカとしほは、共に戦車喫茶の扉を潜る。

「いらつしやいませー！ 二名様でしようか！」

と、それと同時に制服姿の店員の元気のいい声が飛んできた。

「あ、はい。そうです」

エリカが代表して答えた。すると店員は「ではこちらの席へどうぞ！」とこれまた元気のよい声で二人を奥の席へと案内した。

エリカとしほはその後を追って席に向かう。

しかし、そのときだった。

エリカがふと他の席に目を向けたときに、見てしまったのだ。

窓際の席で、楽しく友人達と歓談する、まほとみほの姿を。

その瞬間、エリカの心の堰が決壊した。

「隊長、それに副隊長……？」

エリカの口から自然と言葉が零れた。エリカの言葉によって、しほも二人に気がついたようだった。

「エリカ……それに、お母様……？」

まほが驚いたように口にする。みほも、エリカとしほの姿を見て驚いて硬直しているようだった。

「……いや、元でしたね」

だが、エリカにとつてそんな二人の様子など関係なかった。

「まさかこんなところでお二人を見かけるだなんて思っても見ませんでしたよ。そちらの方はご友人ですか？ 実に楽しそうですね」

エリカは自分でも驚くほどに嫌味つたらしい口調で言った。

顔は半笑いで、馬鹿にするような顔つきだ。

「まだ戦車道をやっているとは思わなかったわ」

それに続くようにしほが言う。しほはエリカと打って変わって、厳しい表情と声色である。

「お言葉ですが、あの試合のみほさんの判断は間違っではないませんでしたー!」

まほとみほの向かいに座るもじやもじやとした髪の少女が立ち上がって二人に抗議するように言った。

「部外者は黙ってなさい!」

「す、すいません……」

エリカの言葉に、そのもじやもじやとした髪の少女はおずおずと座る。

「まさか西住流を捨てたと思ったたらあんな無名校で戦車道を始めるなんて……西住流と黒森峰への当て付けですか? ああ、いつからあなたの性根はそこまで曲がってしまったんでしょうね」

「ちよつとそんな言い方くない!?!」

「あまりにも失礼です!」

今度はオレンジ色の髪の少女と、長い黒髪でおっとりした雰囲気少女が立ち上がって言った。

「失礼? その姉妹が今していることがよっほど失礼だと思うけど? ああ無名の新参高の子じゃあ知らないか、その二人が何をしたのかを」

しかしエリカにはその二人の声などどうでも良かった。

エリカには、実質的にまほとみほしか見えていなかった。

「何をつて……」

「その二人はね。黒森峰に泥を付けただけじゃなく、西住流を裏切って学校を出て行ったのよ。本来ならば戦車道なんてできる身じゃないのに、よくあの場に出れたものね、元副隊長?」

「っ……!」

みほの肩がビクリと震え、眉を下げ俯く。

まほもまた、何も言えず座っていた。

「次はサンダース付属と当たるんでしょ? せいぜいみつともない戦

い方をして西住流の名にまた泥を塗らないようにね。まったく、もともと戦車道のイメージダウンになるような学校は参加しちやいけなのよ、そんなことも教えられないなんて本当に駄目になったんですね、〃元〃隊長」

「……強豪校が有利になるように示し合わせて作った暗黙のルールとやらで負けたら恥ずかしいな」

先程まで黙ってケーキを食べていた眠たげな少女が言った。

だが今のエリカにはそんな言葉など鼻で笑う程度のざわめきにしかな聞こえなかった。

「そうね、でも私達が負けることなんてないわ。そこには西住流から逃げ出した負け犬二匹がいるんですもの」

「……………」

「その辺にしておきなさいエリカ、行くわよ」

「……はい。しほさん。それじゃあせいぜい頑張つてね」

エリカは最後に吐き捨てるかのように言った。

その席を去る間際、みほが「エリカさんに……しほさんって……」と二人を見ながら言ったが、その声のエリカとしほに届くことはなかった。

「……先程は、出すぎたことを言って申し訳ありませんでした」

エリカはしほと同じ席に座ると、しほに向けて頭を下げた。

「エリカ……………」

「仮にもしほさんの娘でありながら、つい口が止まらず……やはり、あの二人のことは私には許せません」

「……いえ、いいのです。私も、あの二人にはいろいろ言いたいことがあったわ。でも、あなたが先に怒ってくれたおかげで冷静になれた。感謝しているわ」

しほは先程の厳つい表情のまま言った。

だが、その声色は普段よりもどこか疲れているような感じをエリカは受けた。

——あの二人のせいだ。あの二人のせいで、しほさんはこんなに

……!

エリカの内で、先程から燃え盛っていた怒りの炎が、いつの間にかドロドロのマグマへと変貌し始めていた。

「いらつしやいませ、これはサービスです!」

と、そこでその緊張を壊すかのように、エリカとしほの間のテーブルにクッキーが置かれた。

しほは驚いた表情でそれを見る。

「あの、まだ注文していないのですが……」

「いえ! 今日はこちらどうぞご家族でいらつしやったお客様にクッキーをプレゼントするキャンペーンをしております! ご注文がお決まりになりましたらまたお呼びください! では!」

店員ははつらつに言うのと、その場から去っていった。

「……どうやら、親子と間違われたようね」

「まあ、仕方ないでしょう。高校生と大人が二人で来ていれば。それでいいじゃないですか。今だけは、私があなたの娘になりますよ、しほさん」

「……あなた」

しほはそんなエリカの言葉に思わず笑みを浮かべた。

エリカが自分を気遣っていつてくれたのだと思っただからだ。

だが、エリカの心中は少しばかり違っていた。

——そうだ。あんな二人、しほさんの娘に相応しいものか。しほさんにあんな顔をさせる、あんな二人……!

エリカはクッキーと一緒に飲み込んだ言葉を腹の中のマグマで燃やしていた。

彼女は見逃さなかったのだ。まほとみほの姿を見たときにしほが一瞬だけ見せた、とても苦しそうな表情を。

心という火山から流れるマグマは、逸見エリカという人間をくまなく流れていた……。

第4話

「失礼します。奥様、食事の準備が整いました」

黒森峰学園艦にある西住邸。

学園艦の中においてもかなり大きな屋敷であるそこで、女中の菊代は主人であるしほに夕食の準備ができたことを伝えに来た。

「……奥様？」

しかし、しほは答えない。

そもそも、部屋の様子がまずおかしかった。

部屋には灯りが灯っておらず、しほは暗い部屋の中でただ黙って正座しているだけだった。

「あの……」

「……」

菊代の呼びかけにもしほは黙ったまま座る。

もしかして邪魔されたくないのではと思ひ、菊代は一旦引き返そうと立ち上がろうとした。

「……菊代」

だが、そのときしほは小さな声で菊代の名を呼んだ。

「……はい」

菊代はそれに落ち着いた声で答え再び座り直した。

「……私は、どうすればいいのでしょうか」

「……と、いいいますと？」

菊代はしほの言葉をゆっくりと待つ。こうしてしほが菊代に相談してくることは少ない。菊代は、しほがあらゆることを背負い込む性格だと知っていた。

「私は、西住流の家元として正しいと思うことをしてきました。これまで、ずっと。しかしそれは、本当に母として正しいことだったのでしょうか？」

「……」

「今日、まほとみほに会いました。そのとき、私の心は複雑な気持ちで満たされました。一つは、母としての嬉しさ。娘達が知らぬ土地で友

人を得て幸せそうにしていること。もう一つは、家元としての怒り。西住流に背を向けて黒森峰を出て行ったのに新たな土地で戦車道を始めるなど、西住流にもとる行為です。その二つの感情がせめぎ合い、私は家元としての怒りを優先しました。まほもみほも黙っていました。きつと呆れていたのでしょうかね。でも、私にはそれしかできなかった。それが、私の生き方ですから……」

「……はい」

菊代はただ一言返事をした。

肯定でも否定でもない、ただの返事だ。

しほは話し続ける。

「しかし私が感情を荒立てる前にエリカが怒ってくれたおかげで冷静になれ、私は母としての感情を思い出しました。私は……迷っているのです、今更。母として生きるべきか、家元として生きるべきか……。馬鹿馬鹿しいでしょう。これまでずっと家元として生きてきたというのに」

「……私は」

菊代はそこまでしほの話を聞くと、あくまで冷静な様子で口を開いた。

「私は、奥様のしたいままになさるとよいと思います」

「だから、それが分からないと……」

「いいえ、奥様は既に答えを出しているのです。ただ、それに気がついていないだけかと……。このようなことを言うご無礼をどうかお許し下さい、奥様」

菊代はゆつくりとしほに頭を下げた。

その菊代を見て、しほは僅かに笑みを浮かべた。

「……まったく、あなたには敵いませんね」

「いいえ、私はただの女中。私の言葉など、木々のざわめき程度にしか過ぎません。決めるのは、奥様自身ですから」

「ふふ、そうですね……さて、それでは遅くなりましたが夕食を頂きましょう。菊代、今日の献立は何かしら？」

しほはすくつと立ち上がるといつも通りの調子を取り戻していつ

た。

菊代は、そのしほにいつも通りの笑顔で返した。

「はい。今日の献立は——」



「許さない、許さない、許さない……！」

エリカは寮の自室にて、そう呟きながら机に向かっていた。

しほの立てたスケジュールにおいては、もう勉強は辞めるはずの間帯である。しかし、エリカは勉強をやめようとはしなかった。

「許さない、許さない、許さない……！」

全身を駆け巡る怒りが、彼女の手を、目を、口を止めなかった。

エリカは呪詛の言葉を吐き続けながらも勉強に励んでいた。それは極めて異様な光景だった。

「私は絶対に許さない……！」

エリカが戦車喫茶で西住姉妹に会ったときの怒りは未だ冷めやらず。

むしろより激しく燃え、エリカを駆り立てていた。

その日から、エリカの張り詰めた生活が元に戻ってしまった。



「しほさん！ もっと……もっと私に訓練をお願いします！」

翌日の訓練から、エリカはより内容の向上をしほに頼むようになった。

しほとしては、エリカがより高みを目指してくれるのは嬉しいことだったのだが、訓練の様子からエリカの様子が何かおかしいことは分かっていた。

だが、それは自分の娘達に会って感化されただろう程度にしかしほは思っていなかった。

それは正しくも間違っていた。

感化されたのはその通りである。

しかし、その程度はしほが考えている以上のものだった。

「駄目です。現状のままです十分です」

しほは最初過度な訓練によって体を壊すことを懸念し、エリカの頼みを断っていた。

「そこをどうにかお願いしますしほさん！ 私のもっと……もっと強くなりたいです！」

けれども、エリカはそれでもずっと食い下がった。

しほはそれを知波単学園との戦いまでは拒否し続けた。

それ以降もしほとしては拒否するつもりだった。

ところが、しほもその考えを改めてしまう出来事が起きる。

みほとまほのいる、大洗女子学園が一回戦目のサンダース大学附属高校相手に勝利を収めたのである。

優勝候補の一つとして見られている名門校相手に無名校が勝利を収めたこの結果は、各校に衝撃をもたらした。

そして、そのことに一番の衝撃を受けたのは、エリカ達黒森峰の生徒であった。

「あの西住姉妹が無名校を勝利に導いた。」

「西住姉妹は私達に復讐するつもりだ。」

「再び黒森峰に敗北を与えるつもりだ。」

そのような噂が、黒森峰でまことしやかにささやかれるようになった。すると、隊全体が一種の不安に包まれ、より激しい訓練を求めるようになったのだ。そのことは、エリカとしほの訓練にも言えることであった。

「見てくださいしほさん！ 元隊長と元副隊長は、無名校であるサンダースに勝ちました！ これは由々しき事態です！ 我々は万全を期して迎え撃つべきです！」

エリカも、そしてエリカの部下達もエリカの能力向上になるならとエリカの訓練の質の向上を訴えた。

エリカ一人の声ならまだしも、隊全体の声ならばしほも無視するわけにはいかなかった。

あくまで学生の自主性を尊重しているという建前上、それを断ることは外部の意見が強すぎる状況であると認めることになるからである。

こうして、しほはエリカの訓練の内容をより厳しいものにした。

しほは訓練の内容が上がるだけなら問題ないと思った。

されど、エリカは自らの時間をしほに黙って削っていた。今やしほの立てたスケジュールは完全に破られている状況になっていた。

エリカは再び寝食を忘れ戦車道に没頭するようになった。

普段の勉強の時間も戦車道に費やすようになったため、以前よりもひどい状況と言えるだろう。

それは黒森峰が二回戦の継続高校に勝利し、そして大洗が同じく二回戦でアンツィオ高校に勝利を収めるとより激しくなった。

「次の大洗の相手はプラウダ……普通に考えたら大洗がプラウダに勝つなんてことはない。でも、大洗にはあの姉妹がいる。念には念を入れないと……！」

エリカはより熱を入れて戦車道に入れ込んだ。

とは言え、二回戦を終えた後になると、さすがのしほもエリカの異変に気がつくようになっていた。

「エリカ……もしかして、私の作ったスケジュールを破っている……なんてことはないわよね」

しほはエリカを問い詰める。

「いいえ、大丈夫です。私はちゃんとしたペースで勉強と休息を取っています。どうか安心して下さい」

エリカはまるで本当のことのように嘘を言う。

しほとしてはかなり疑い深かったが、エリカの私生活に踏み込むわけにもいかなかったため、エリカの言葉を信じるしかなかった。

エリカの歪な努力。

それは決勝の直前まで続くかに思えた。

だが、それは思わぬ形で止まることになる。

プルルルル……。

エリカの携帯が鳴り響く。

それは、放課後のしほとの訓練中。聖グロリアーナとの戦いに勝利した直後のことであった。

「はい。もしもし逸見です。……えっ？　ちよ、ちよと待って下さい!?!　本当ですか!?!　……はい、はい。分かりました。では、後ほど……」

エリカは暗い面持ちで電話を切る。

しほはそのエリカの様子からただ事ではない事態が起きたのを察知し、恐る恐るエリカに聞いてみた。

「……どうしたの、エリカ?」

「……家族が、事故にあつて重体と……今電話で……」



しほは熊本にある大きな総合病院の待合室で座っていた。

エリカから事情を聞き、すぐさま西住の家のへりを用意させ病院まで飛んでいったのだ。幸いにも黒森峰学園艦は熊本に近い距離にいた。

そして、今はエリカが医者から話を聞いているのを待っている状態である。

「……………」

待合室には殆ど人影はない。

と言うのも、今は夜遅くで本来ならばもう普通の患者は訪れない時間帯だからである。

もうどれだけ待っただろうか。しほは嫌に時間が長く感じた。

もうそろそろ時計は十時半に差し掛かろうとしていた。

コツ、コツ、コツ、コツ。

と、そこで、硬いリノリウムの床を叩く音が聞こえた。

しほが顔を向けると、そこには地面を向きながらゆっくりとしほの方に歩いていくエリカの姿があった。

「エリカ!」

しほはエリカに駆け寄る。

エリカは、しほがエリカの目の前に来てやっとしほのことに気がついたのか、ゆっくりと顔を上げた。

「……しほさん」

「……その、どうだったの。ご家族の容態は」

「……一応、峠は越したと。ですが、しばらくは面会謝絶のようです」
「そう……」

しほは喜んでいいのか分からなかった。

命が助かったのは喜ばしいことだが、面会謝絶ということはまだ予断を許さない状況でもあるということである。

親しいものがこれほどまでの大怪我に見舞われたことがないため、しほは何と言葉を掛ければいいのか分からなかった。

「……私のせいなんです」

しほが言葉を掛けあぐねていると、エリカがポツリとしほに向かって漏らした。

「それは、一体どういう……」

しほはエリカの言っている意味が分からず聞き直す。

エリカはしほに視線を向けないまま喋り始めた。

「私、ずっと家族とは会っていませんでした。家族は私が戦車道をやることに反対していて……。それを振りきった形で家を飛び出して行って……。でも、この前電話があったんです。一緒に旅行に行かないかと。もし私が一緒に来てくれるなら、皆で海にでも行こうと。けれど、私はそれを断った。大切な大会が違いからと。内心では大会を理由に家族から逃げたかっただけなのに。そして、なら仕方ないと家族は山に行っただけです。そこで、家族は突然の崖崩れにあって、それで……！」

エリカはそこまで言うと、両手で顔を抑えて泣きだした。

「私が、私と一緒に行っていけば……！ お母様もお父様もお姉様も、みんな私のことを心配してくれていたのに、それなのに私は……！」

「エリカ……！」

しほは泣くエリカを強く抱きしめた。

エリカは両手を顔から外し、驚いた顔をしほの顔の横で見せる。「あなたのせいなんかじゃないわ！ あなたは何も悪くない！ 誰かがそう言ったとしても、私がそれを否定する！ 私だけは、あなたの味方よ……！」

しほはなぜこんなにエリカに親身になってしまうのか分からなかった。だが、今のエリカを放っておけない。そんな気がしたのだ。「しほさん……う、うわああああああああっ！」

エリカは大声で泣いた。

彼女の泣き声は、人の少ない病院の待合室に大きく響き渡った。



エリカはベッドの中で考える。

家族が離れ離れになる辛さを。

会いたくても会えない苦しみを。

エリカはそれを肌身で味わった。

その身で、もう二度と会えないかもしれないという苦痛を知った。

「……じゃあ、隊長と、副隊長も……？」

そこでエリカが考えたのは、西住姉妹のことだった。

彼女らの母であるしほは、エリカのことをまるで自分の娘のように心配してくれた。それはとても嬉しいことだった。

だがしほは、本当の自分の娘にそうしてあげたことはあったのだろうか？ ずっと家のしきたりで、できなかつたのではないか？

それはとても辛いことだっただろう。家族として接したくても接しられないことはとても苦しかったのだろう。しほがあのとときした辛い表情は、きっとそんな感情の現れだったのだろう。

だが、まほ達はどうかだったのだろうか？ エリカは初めてまほ達の気持ちについて考え始めた。

まほもみほも、親からの親らしい愛をなかなか受けられずにいて辛い気持ちでいたのではないだろうか。そうしていくうちに、姉妹同士の結びつきが強くなっていったのではないだろうか？

そうならば、黒森峰を去ったのも、今では納得できなくもないと、エリカは思った。

家族を失いかけたのをきっかけに、今初めてと言っていいほどにエリカの思考に落ち着いた考えが現れていた。

「隊長も、副隊長も辛かったのかな……」

自分の気持ちを優先して、親の元から離れていくというのは自分と重なる部分もある。だが、その重みはまったく違う。

エリカはそんな西住姉妹のことについて初めて穏やかな心境で考えながら、夜を過ごした。

大会の決勝戦で大洗と当たることが分かったのは、その翌日のことだった。

第5話

とうとうその日がやって来た。

第六十三回戦車道全国高校生大会決勝戦。

実況中継用の何台ものカメラがエリカ達を映し出す。

エリカ達はカメラに映されながら、互いに審判を間に挟んで例をした。

『よろしくお願いします！』

今のエリカはとても健やかな気持ちだった。過度な訓練はあまり変わらなかったが、その心境が大きく変化していた。

現に、今西住姉妹を目の前にしているというのに、あのドロドロと流れていたはずのマグマの熱は一切なかった。

「エリカ……きつとお前は私達を恨んでいるだろう。だが、私達は負けるわけにはいかないんだ。大洗のため、大切な友人のために……だから、全力でいかせてもらう」

挨拶の後、まほがエリカに声をかけてきた。

その目には、確固たる意思が秘められていた。

家族の事故に遭う前のエリカなら、口から憎しみの言葉が漏れていただろう。

だが、今のエリカは、

「ええ、もちろんです。本当の西住流を見せてあげましょう」

と、不敵な笑みで言うだけだった。

まほはそのエリカに驚いたような表情で見ている。

当然だろう。戦車喫茶であれだけの悪態をついたエリカである。

それが、まるで別人のように爽やかにそう言ったのだから。

実質、エリカの心はあの日とは別人のようになっていた。今のエリカは、不思議と落ち着いていた。それでも、これまで張り巡らせていた緊張の糸はずっと張り続けているのだが。

エリカは来賓席に目を向けた。そこにいる、しほへと。

しほは厳しい表情で演習場全体を見ている。西住の家元としての、しほの姿だった。

エリカはそんなしほを一瞥した後、すぐさま自分の搭乗する戦車へと駆けていった。

こうして、最後の決勝戦が始まった。

決勝戦は激戦だった。

最初は黒森峰が大洗のフラッグ車に奇襲を掛けるも、他の車両が盾となりその奇襲を失敗させた。

その後、大洗は高所を取り、黒森峰を翻弄。大洗の挑発に乗り撃破される車両もあった。

さらに、みほが川を渡っている最中に水没しかけた戦車を助けると一幕があった。

その光景を見たエリカは、

「……バカね」

と、呆れながらもどこか満足気に呟いた。

一緒に戦っていた同学年の赤星小梅——みほに去年助けられた少女の車両からも嬉しそうな声が聞こえてきた。

そして、戦いは市街戦へと移る。

数と質に優っているはずの黒森峰は、大洗の奇襲、奇策により着実に数を減らされ、ついには虎の子として投入したマウスすら撃破されることとなった。

それほどまでに黒森峰は追い詰められた。

以前のエリカなら、癩癩を起こし怒りに震えていただろう。

「ふふっ……いー」

だが、違った。今のエリカは、思わず笑みが溢れていた。

あの西住姉妹と、ここまでの戦いができている。その高揚感がエリカを包んでいた。

そしていよいよ戦いは最終局面へと移る。

閉所にエリカのフラッグ車、まほ車、みほのフラッグ車の三台が閉じ込められたのだ。

狭い通路を大洗のポルシエタイガーが封鎖したのが原因だった。

西住姉妹を相手にした一对二の絶体絶命な状況。

だが、やはりエリカは笑っていた。

「いきますよ、まほさん、みほ……！」

いつしかエリカは西住姉妹を名前で呼び、決戦に突入した。

阿吽の呼吸で動く西住姉妹の戦車。その戦車についていくだけでエリカは精一杯だった。

だが、それでも楽しかった。

それが楽しかった。

そしてその戦いの刹那にエリカは僅かな隙を見出した。

「そこだああああああつ！ 撃てええええええええええええつ！」

エリカの声と共にエリカ車が火を吹く。

その瞬間、みほ車もまた砲撃をした。

その一瞬の出来事の結果はこうだった。

エリカフラッグ車、撃破。まほ車、撃破。みほフラッグ車、生存。

大洗女子学園の勝利だった。



——終わったんだな。すべてが。

自陣に戻ったエリカは、夕日の中一人勝利に喜ぶ大洗を見ながらそう思った。

西住姉妹に抱いた憎しみも、あの訓練の日々も、しほとん生活も、すべてが終わりを告げたのだ。

それは、今のエリカのすべてが終わったということだった。

「エリカっ！」

立ち尽くすエリカの元に駆けて来る姿があった。

しほだった。

「よく、努力しましたね……！」

しほはエリカを抱きしめようとする。

だがエリカは、その腕をそつと押しとどめた。

「エリカ……？」

「しほさん。今あなたが抱いてあげべきは、私ではないでしょう？」
そう言つて、エリカは大洗の方に視線を向ける。

しほはエリカの意図に気づき、困つたような顔を見せた。

「しかし……」

「いいから、行つてあげて下さい。今行かないでいつ行くんですか。家族が抱いてあげるべきときは今なんです。ちゃんと会えるときに合わない、後で後悔することになるんですよ……」

エリカは目に涙を浮かべながらも、笑つてしほに言った。

しほはエリカその姿を見ると、ゆつくりと頭を縦に振つて、大洗のほうに歩いて行つた。

「……お母様!？」

「お母さん……!?!」

まほもみほも、突然現れたしほに驚いているようだった。

しほは少し言葉に困つたように目を左右に泳がせながらも、最後には深呼吸して二人を優しい眼で見つけ、口を開いた。

「まほ、みほ。見事でした。あれがあなた達の戦車道ですね。あなた達は、あなた達の戦車道を見つけたのですね……おめでとう、まほ、みほ」

「お母様……お母様っ!」

「お母さあんっ……!」

その言葉に感極まったのか、まほとみほはしほの胸に抱きついた。

「お母様からそんな言葉が貰えるだなんて、思わなかつたです……!」

ありがとうございます……!」

「私、お母さんがエリカさんに取りられちゃつたのかと思つてた……!」
でも、やっぱりお母さんは私達のお母さんだつたんだね……!」

「まほ、みほ……!」

まほとみほは泣いていた。

その姿を見て、しほもまた目を潤ませた。

——ああ、私はこれが見たかつたのかもしれない。

エリカはお互いの絆を取り戻した西住家を見ながら、そう思った。
しほの笑顔、まほとみほの嬉し涙。

それは、きつと憎しみのままに勝利したときに感じるものよりも尊
いものなのだろう。

今のエリカには、それが分かった。

色々なことを考え抜き、そして西住姉妹と戦って戦車道の喜びを取
り戻したエリカの正直な感想だった。

「……あれ？」

エリカの視界が、だんだんと霞み始めた。エリカはその感覚に憶え
があった。

——なるほど、これは、倒れる前の感覚だ。以前にも、あつたなあ、
これ。

まるで他人事のように考えながらも、エリカの意識は白く溶けてい
く。

そこに苦痛はなく、光で溢れていた。

「二人にちゃんと紹介したい人がいるんです。私は彼女のおかげで私
が母としての私を選んでいたことを知りました」

「……それは、もしかして」

「ええ、そうです。あなた達はよく知っているでしょうが、ちゃんと私
の恩人として紹介したいんです。エリカ！ こつちに来て……エリ
カ？ エリカ!?!」



西住流の本家たる西住屋敷。

周りの住居よりもひとときわ大きく、庭には豊かな木々が茂っている
その屋敷の庭に、一人の着物の女性が立っていた。

その女性は庭の中でも一番太い樹の下に立ち、そよ風を浴びてい
る。

「エリカ」

名前を呼ばれ、その女性——エリカは振り返る。

銀髪をなびかせ、少々疲れたような顔を振り返って名前を呼んだ女

性に見せた。

「しほさん」

エリカの名を呼んだ女性——しほにエリカは応える。

そして、樹の下からしほの下にゆっくりと歩いて行った。

「どうしたんですか?」

「いえ、あなたが庭で一人で立っているから、気になって。体は大丈夫なの?」

「ええ、体は大分快方に向かっているとお医者様が言ってくれました。この分なら、大洗のエキシビジョンマッチが終わる頃にはまた戦車に乗れると思います」

「そう、良かった」

エリカとしほは笑いあった。

エリカは今、西住家に世話になっていた。

あの大会の直後、倒れたエリカは病院に運ばれるも、命に別状はないと判断された。どうやら、あまりの無茶がすべての緊張の糸が切れたことによつて一気に襲つてきたらしい。

エリカはしほに大いに叱られた。そしてその後、よければ西住本家で療養しないかという誘いを受けた。エリカはその誘いを飲んだ。

西住家からなら、家族のいる病院にも見舞いに行けるとい判断からでもあった。しかしそれよりもなにより、しほと一緒にいたいという気持ちがそこにはあった。

「そういえば、ご家族のほうは?」

「はい。家族ももうすっかり回復して、見舞いに行く度に元気な声を聞かせてくれますよ。さすがにまだ動き回れるというわけではありませんが……」

「早く治るといいわね。あなたと一緒に」

「ありがとうございます。……それもこれも全部、しほさんのおかげです」

エリカはしほに頭を下げた。

しほは急なことに驚く。

「ちよ、ちよつとどうしたのかしら?」

「いえ、改めてちゃんと saying おこうと思つて。……思えば、私は茨の穴の中にいたんです。墮ちるにも登るにも苦痛な憎しみという茨の穴の中に。でも、そこから助けだしてくれたのはあなただった。あなたが、私の手を取つてそこから助けだしてくれた」

「それは……こつちが言いたいことだわ」

しほはエリカの言葉にゆつくりと首を振つて言つた。

「しほさんが？」

「ええ。私はずつとあなたの言う茨の穴の底にいたの。西住という家のしがらみという茨の底に。でもあなたが希望の光を投げかけてくれた。家族の気持ちというものを手を差し伸べて見せてくれた。感謝したいのは、私の方なのよ」

「そんな、私は……」

エリカとしほはなんだか妙な気まずさ——と言つても何故だか心地いいもの——に囚われて言葉が止まる。

二人がしばらくもじもじとしていると、そんな二人の横からぬつと現れた影があつた。

菊代だつた。

「奥様。エリカ様。冷たいお茶でもいかがでしょうか？ お茶うけとして羊羹も用意してありますよ」

「え、ええ！ それはいいわね菊代！ さあ飲みましょうエリカ！」

「は、はい！ そうですね！」

二人は慌てながらも縁側に座り、煌めく太陽の下お茶を飲み始めた。

「ふふふ……」

「ふふつ……」

エリカとしほは縁側で歓談する。

その姿は、まるで本当の親子のようだった。

いや、今この瞬間において、二人は本当の親子なのだ。

茨の穴を抜けだした、確かな絆に結ばれた親子の姿が、そこにあつた。